OKADA-ROOM Vol.12
岡田三郎助と日本近代洋画の名品

会期　2018 年 11 月 28 日（水曜日）～2019 年 2 月 11 日（月曜日祝日）

佐賀県立美術館は開館以来、明治から昭和初期にかけて活躍した佐賀県出身の日本近代洋画の巨匠、岡田三郎助（おかだ・さぶろうすけ、1869～1939）の画業と人物を顕彰してきました。館内の常設展示室「OKADA-ROOM」では、岡田作品を中心に館収蔵の近代洋画の優品を紹介し、ご来館の皆様にご好評をいただいています。

平成３０年 11 月 28 日から始まる OKADA-ROOM の新たな展示では、県立美術館所蔵作品を中心に、岡田三郎助の名品とともに、日本近代洋画の大家たちの作品をあわせて下記により紹介します。日本人で初めて外国で洋画を学んだ百武兼行、岡田とともに日本の洋画に新風を吹き込んだ黒田清輝と久米桂一郎、そして夭折の天才画家青木繁など、その顔触れは多士済々。

岡田作品の典雅な世界とともに、日本近代洋画の豊穣な歩みをぜひ御鑑賞ください。

No.	作品名・資料名	英訳	作者名	制作年	寸法（本紙・㎝）	材質	所蔵
1	矢調べ	Testing arrows	岡田三郎助	1893（明治 26）	72.5×105.0	油彩・カンヴァス	館蔵

堀江正章が主宰する画塾「大幸館」の卒業制作として描かれた、岡田 25 歳の頃の作品。まだ旧来の暗い色遣いが画面を支配してはいるが、老人の腰あたりの陰影のつけ方に、師より学んだ色の配置の工夫がみられる。のちに岡田は、初めて堀江のもとで本格的な色彩の表現を学び、これが後に黒田清輝らのもたらした新しい画風を理解するのに役立った、と回想している。

2	清楚（少女）	Graceful Girl	岡田三郎助	明治 40(1907)	43.8×33.5	油彩・カンヴァス	館蔵

赤い着物の少女が、首をかしげてこちらを見つめている。髪や着物の輪郭はぼかされ、画面中央の少女の顔に観賞者の視線を惹きつける効果を上げている。少女の顔において特に印象的なのは、きらめく大きな目である。うつくしい瞳を備え、甘さを漂わせた岡田流の美人は、雑誌の表紙や挿絵、ポスターを通じてひろく普及し、新たな美人の典型となっていった。

3	婦人像	Portrait of a Woman	岡田三郎助	1909（明治 42）	60.5×48.7	油彩・カンヴァス	館蔵

岡田 41 歳の頃の作品。女性の着物と背景の壁はシンプルな濃褐色でまとめられ、暗がりから肌の白さを浮かび上がらせるような効果を与えている。女性の表情も丁寧に描きこまれ、当時の筆の充実ぶりをうかがうことができる。岡田はこの時期、本作や《薊》（当館蔵）など、物思いにふけるようなメランコリックな表情の女性像をたびたび描いた。

4	桃の林（大石田横山村）	Peach Garden (Yokoyama-mura, Oishida)	岡田三郎助	1917(大正 6)	50.0×60.6	油彩・カンヴァス	館蔵

山形県北村山郡横山村（現在の大石田町）には、りんごや桃、桜、すもも、梨の木が茂る広大な果樹園があった。知人にここを紹介された岡田はすっかり気に入り、本作を描いた。霞がかった空に向かって枝を伸ばす桃の木々が、リズミカルなタッチの厚塗りで表現され、みなぎる生命力を見る人に伝える。

5	富士山（三保にて）	Mt.Fuji (view from Miho)	岡田三郎助	1920（大正 9）	137.3×197.5	油彩・カンヴァス	館蔵

細くたなびく雲と、朝日に照らされた山頂の雪が美しい。富士山は古くから描かれてきたが、近代においては日本一国家の象徴としての役割を担うようになった。なお、岡田とともに白馬会に参加、美術学校で教鞭をとった洋画家、和田英作の《朝陽富士図》（1917 年）は本作とほぼ同一の構図である。

No.	作品名・資料名	英訳	作者名	制作年	寸法（本紙・㎝）	材質	所蔵
6	裸 婦	Nude	岡田三郎助	1935(昭和 10)	99.8×65.5	油彩・カンヴァス	館蔵

岡田 67 歳、1935（昭和 10）年の第二部会展に出品された作品。当時の新聞では「今までの帝展よりもつと力瘤を入れた作品」（報知新聞）などと評され、早くより名作の呼び声が高かったとみられる。展覧会後は朝鮮の李王家が所蔵し、旧李王家美術館（現在の徳寿宮美術館、ソウル市）に飾られたが、1940（昭和 15）年の岡田の遺作展に出品されたのちは、一般に公開されることがなかった。（佐賀県重要文化財）

7	伊豆山風景	Landscape of Izusan	岡田三郎助	1935（昭和 10）	65.1×100.1	油彩・カンヴァス	館蔵

1935（昭和 10）年、岡田は伊豆・熱海を訪れ、本作や《淙々園にて》などの作品を描いた。森の陰影の描写は湾の稜線を際立たせ、穏やかに打ち寄せる海面との間にコントラストを生み出している。熱海には 1895（明治 28）年から鉄道が開通し、東京からほど近い景勝地として、多くの文化人や観光客を集めていた。

8	淙々園にて	At Sosoen	岡田三郎助	1935(昭和 10)	40.9×53.0	油彩・カンヴァス	個人蔵

滞在していた旅館にて、《伊豆山風景》と同じ湾を望んで描いた作品。清涼な水辺の空気と和服の女性という組み合わせは、岡田の先輩格であり親しく交遊した黒田清輝の代表作《湖畔》（東京文化財研究所蔵）を思い起こさせる。モデルは当時、岡田のモデルを数多く務めた北村久子。一心に読書にふける姿は、柔和ながら凛とした雰囲気を漂わせる。

9	タンバリンを持つ少女	Girl with Tambourine	百武兼行	1881（明治 14）頃	65.0×54.5	油彩・カンヴァス	個人蔵

外務書記官として、百武が３度目にヨーロッパを訪れた時期に描いたもの。物憂げに目を伏せ、タンバリンを持つ手元を見つめる少女は謎めいた雰囲気をまとう。幼い頃、岡田は東京・葵坂の鍋島邸内で百武の油彩画を目にし、その陰影の効果に大きな衝撃を受けた。幼い彼は百武を真似て、陰影を付けた絵を描くことを試みたという。

百武兼行（ひゃくたけ・かねゆき、1842～1884）

現在の佐賀市片田江に生まれる。1871（明治 4）年からの鍋島直大（第 11 代佐賀藩主）のヨーロッパ巡遊に随行し油彩画に出会い、のちロンドン、パリ、ローマで本格的に学ぶ。いち早く西洋で油彩画を学んだ日本洋画界のパイオニアの一人。代表作の《臥裸婦》（ブリヂストン美術館蔵）は、日本人が油絵で描いた裸婦の最も早い例である。帰国後に農商務省に出仕するが、病を得て帰郷、42 歳で没した。

10	日傘の婦人のいる風景	Scene with a woman under the parasol	小代為重	1890（明治 23）	42.8×33.5	油彩・板	館蔵

湧き立つ入道雲の下、女性が日傘をさし歩く。戸口の人物は彼女を見送っているようである。日常の一場面を活き活きとした筆致で描いた本作は、時を超えて当時の人々の息遣いをも伝える。本作は小代が黒田らと白馬会を興す以前に、明治美術会で活躍していた時期の作品。はっきりした輪郭線をもちい、明るさと陰影を明確に描くなど、初期の小代の画風をよく伝える一枚である。

小代為重（しょうだい・ためしげ、1861～1951）

佐賀に生まれる。旧姓は中野で、岡田三郎助の母方の遠縁にあたる。千葉師範学校の教員を務めながら、百武兼行から油彩を学び、1885（明治 18）年からは工部大学で建築装飾を教える。油彩画を学ぶ決心した少年時代の岡田にとってよき相談相手だったようで、曾山幸彦の画塾を紹介するなどの援助をしている。明治美術会や白馬会創設に携わるなど洋画家としても活躍したが、本来は機械工学の専門家を自認しており、東京電信学校では機械製図を教授するなど、多才な人であった。

No.	作品名・資料名	英訳	作者名	制作年	寸法（本紙・㎝）	材質	所蔵
11	京都加茂川の景	Scene of Kamogawa,Kyoto	久米桂一郎	1893（明治 26）	31.4×45.0	油彩・カンヴァス	館蔵

久米桂一郎は明治 26 年（1893）年、留学先のフランスから帰国。日本初の洋画家の団体、明治美術会に参加するが、彼がかの地で学んだ外光表現、その明るい画面は日本の洋画壇に驚きをもって迎えられ、やがて多くの若き画家たちの心をとらえてゆく。本作は同年、ともにパリから帰国した盟友、黒田清輝と京都に赴いた際に描かれた作である。

久米桂一郎（くめ・けいいちろう、1866～1934）

佐賀市八幡小路に生まれる。父は歴史学者の久米邦武。明治 19 年フランスに留学し、ラファエル・コランに学ぶ。同 26 年帰国し、黒田清輝とともに同 29 年白馬会を結成する。同年東京美術学校西洋画科で教鞭をとる。以降は画作から遠ざかり、西洋美術の啓蒙者、また美術行政家として活躍した。

12	八月	The Far East,August	中沢弘光	1899（明治 32）	50.0×38.0	油彩・カンヴァス	館蔵

明治の日本、なつかしくのどかな日常が描かれている。夏の照りつける太陽の光もここでは優しげである。手前の子ども二人は姉と弟であろう。楽しそうな笑みを浮かべながら何かを見つめている。後を見れば、同じ方向を指差す子どもが。彼らの目前には何があるのだろうか。日本の近代絵画において、笑顔の人物が描かれた作品は意外にも少ない。

16	洋装の女	Woman in Western style	中沢弘光	1940（昭和 15）頃	98.5×33.4	油彩・カンヴァス	館蔵

中沢弘光（なかざわ・ひろみつ、1874～1964）

日向佐土原藩士の長男として東京芝に生まれる。明治 20 年曾山幸彦の画塾に入る。同 29 年東京美術学校西洋画科に入学、同年創立の白馬会に参加する。大正 11 年より 1 年間西欧を遊学。文展、帝展、日展に出品を続け、昭和 5 年帝国美術院会員、同 19 年帝室技芸員となる。また光風会、日本水彩画会、白日会を結成し、画壇の長老として重きをなした。

13	繊月帰舟	Boat Returnning under the Crescent Moon	青木 繁	明治 43(1910)	49.5×60.5	油彩・カンヴァス	個人蔵

海から上がった漁師たちが、夕照の中家路を急ぐ。はるか上空にはうっすらと三日月が光る。かつて青木が《海の幸》（ブリヂストン美術館蔵）で見せた、神話世界への憧れと溌剌たる創造力はここでは影をひそめ、画面はあくまで静謐である。孤独と失意に苛まれてはいても、まだ絵筆を握ることができる。その思いが最後の大作《朝日》（佐賀県立小城高等学校同窓会黄城会蔵）につながっていったのではないだろうか。

青木　繁（あおき・しげる、1882～1911）

久留米市に生まれる。森三美から洋画のてほどきを受け、画塾不同舎を経て東京美術学校に入学。神話・説話を題材とする画稿で脚光を浴びた。明治 37 年、千葉県の布良で《海の幸》（ブリヂストン美術館蔵）を描く。明治 40 年、東京勧業博覧会に《わだつみのいろこの宮》（ブリヂストン美術館蔵）を出品、三等賞に終わる。同年帰郷、中央画壇に帰らぬまま 28 歳で病没した。

No.	作品名・資料名	英訳	作者名	制作年	寸法（本紙・㎝）	材質	所蔵
14	画室内	In the atelier	黒田清輝	1889（明治 22）	40.7×32.0	油彩・カンヴァス	館蔵

黒田清輝（くろだ・せいき　1866～1924）

鹿児島城下に生まれる。明治 17 年法律研究のため渡仏。翌年藤雅三を知り、ラファエル・コランに接し、画学修業を決意する。同 19 年コランに入門、久米桂一郎を知る。同 26 年帰国。翌年天真道場設立、同 29 年白馬会を結成する。同年東京美術学校西洋画科の授業を依嘱され（同 31 年教授）、同 40 年の文展開設以来官展の審査員をつとめ、洋画界の中枢を占めるに至る。同 43 年帝室技芸員、大正 2 年国民美術協会会頭に就任、同 9 年貴族院議員、同 11 年帝国美術院長となる。

15	裸婦	Nude	藤島武二	大正時代	60.4×50.0	油彩・カンヴァス	館「蔵

藤島武二（ふじしま・たけじ　1867～1943）

鹿児島城下に生まれる。明治 18 年上京、川端玉章に入門する。同 20 年東洋絵画共進会等に出品、同 22 年青年絵画共進会で受賞、同 23 年から曾山幸彦に師事し、洋画研究に専念する。同 29 年の白馬会創立に参加、黒田清輝に見出され、同年の東京美術学校西洋画科創設にともない助教授に推挙される。同 39 年から 4 年間、パリ、ローマに留学。大正 13 年帝国美術院会員、昭和 9 年帝室技芸員となる。同 12 年、岡田三郎助とともに第 1 回文化勲章を受けた。

佐賀県立美術館
〒840-0041　佐賀県佐賀市城内 1-15-23
TEL. 0952-24-3947 FAX.　0952-25-7006
E-mail:hakubi@pref.saga.lg.jp　Web. http://saga-museum.jp/museum/